

新たな山村学構築への提言

上久保達夫*

1. はじめに

地域社会理解（地域診断）の為の一仮説を提示することによって、当シンポジウムの発表内容に代えたいと思う。論ずる視点は、飽くまで地域生活者としての山村住民の立場からとすることを常に念頭に置いたものであることをまずお断りしておきたい。

2. 山村の概念規定

「山村」（注1）と言う用語は、各専門領域、例えば柳田国男の流れをくむ民俗学、あるいは経済史、林業経済学、地理学、社会学とりわけ農村社会学等で使用されて来た。

ここでは、とりあえず1965年（昭和40年）制定の山村振興法（以下山振法）の定義により山村を「交通条件および経済的文化的諸条件に恵まれず、産業の開発程度が低く、かつ住民の生活文化水準が劣っている山間地その他の地域」（山振法第2条）とし、更に具体的には、林野率75%以上、人口密度 km^2 当り116人未満の市町村単位をその対象にしている。これは行政側が山村をどのように把握したかと言うことで、そうせざるを得なくなった事情はともかくとして、このように積極的に山村を把握しようとするのは、これまでになかったことであり、前記山村の定義の仕方について、研究者の側から特に強い異論が出ている訳ではない。

3. 岐阜県下、とりわけ木曾三川流域の山村部の概況（注2）

岐阜県の森林面積は、約87万4千haで全国第5位の広さ、又県土に占める森林面積の比率は82.5%で、これは全国第1位のまさに岐阜県は森林県であることは、衆知のことである。県下の市町村は、昭和62年3月31日に吸収・合併されて廃村となった徳山村を除いて、現在14市、17郡の計99市町村数である。木曾三川のまず長野県木曾郡をその本流の水源とする木曾流域には38市町村、郡上郡高鷲村をその本流の水源とする長良川流域には30市町村、揖斐郡藤橋村をその本流の水源とする揖斐川流域には24市町村、その他の水系16市町村、と以上より木曾三川流域の市町村は83を数える。このように岐阜県内を縦横に貫流する木曾三川は、岐阜県のみならず中部圏のいわば大動脈と言えるよう。

次に、前述の山村、とりわけ山振法に指定された振興山村は53市町村、その内木曾三川流域の振興山村は42市町村である。即ち、木曾三川流域の市町村の約半数強が振興山村と言うことになる。

次いで、旧過疎法（過疎地域対策緊急措置法—昭和45年制定）に基づく指定された県内の過疎地

*中京短期大学

域は21町村，その内木曾三川流域は16町村，新過疎法（過疎地域振興特別措置法－昭和55年制定）に基づくそれは25町村，その内木曾三川流域は17町村である。

4. 山村社会の抱える問題点

数字・統計的に見ると，確かに岐阜県内，とりわけ木曾三川流域の山村部の社会が抱える問題は，例えば過疎問題等多々ある。ここでは，本年8月に長良川の中・上流域部郡上郡内七ヶ町村を回って回収した資料や見聞して考えたことをもとに，来たるべき二十一世紀の山村社会を展望してそれに資する，より健全な山村社会発展・地域社会活性化へ向けての一つの仮説を提示してみたいと思う。

尚，8月の山村調査行に先立って岐阜県森林組合連合会をお訪ねしてお聞きした具体的な話題から始めたいと思う。そこでは県下の森林組合の抱える問題点として，次の二点が指摘された。一点は労働力の問題ともう一点は後継者問題である。これらは即ち，山村社会で林業を基盤として生活する者の抱える問題をまさに象徴している。

前者は，高齢化と山離れ現象による人手不足であり，後者は，農林業を主とする第一次産業から第二次・第三次産業への若者の就業構造の変化であり，若者の山離れ・都会志向と関連して，村に取り残された家族の高齢化の問題，産業（とりわけ林業）の衰退による挙家離村の為の村の過疎化の問題，と言う様に相互に密接な関係にある。

これらの問題に対する原因の一端と解決策を考えて見ると，快適な生活環境，即ち教育・医療・福祉の充実と言った住民意識の向上よりも，安定した収入・生計を維持出来る収入源の確保を今以上に重視する村社会の住民の体質にも問題があるし，そう言った住民の行政ニーズ構造をいち早くキャッチして対応する行政側の産業振興対策にも問題はないとは言えない。魅力ある町・村づくり，更には言えば，若者をひきつける行政側の産業振興対策が望まれるところである。

5. 地域診断のための一仮説の提示（注3）

地域診断と言うからには，診断は次の様な手順を踏まなければならないと思う。即ち，地域の実態を踏まえた上での問題点は何か，どうしてそのような問題が生じたのか，その解決策は何か。今日の山村社会の抱える問題に対して，少なくともこれだけは答えなければならないだろう。その回答は，断片的にはあるが，既に述べたので，ここでは，それらに付け加えるべき地域活性化（即ち，真の山村の活性化）へ向けた地域社会学，あるいは村落社会学の立場からの一つの仮説を提示しておきたいと思う。

それは，村落社会，即ち山村地域社会を一つのシステムととらえる時に有効なパラダイムと思われる。外部社会と当該地域社会の構造と機能（これは後述），地域社会間の相互作用（地域間バランスの問題），そしてそれら相互作用がうまく機能する為の地域自律性（注4）（山村地域社会内にお

ける住民の内発的・主体的・自主的行動意欲), 更に付け加えるならば, 地域内のリーダーシップ構造(注5)等々を常に検討することである。

外部社会と当該地域社会の相互作用の構造と機能を考える際, 外部社会のインパクトが地域社会にとって外部からの吸収か, それとも外部による収奪かで地域の発展・衰退を左右し, 又地域自立型村落社会は地域の内発的発展によって, 地域特性に合った経済基盤の確立を可能ならしめ, 地域住民の内発的行動意欲と主体的政策決定を特に重視することにより「地域づくり」「村おこし」運動は, 最も健全な村落社会の建設を目指すことが可能である。それに対して, 地域自律性の備わらない地域社会は, 孤立放置型村落社会と成って外部社会からは完全に隔絶, 究極的には廃村へ至ると言うことを銘記すべきであろう。

山村地域社会は, 地域自律性を絶えず有しながら, 外部社会(例えば, 国・地方自治体・民間の都市資本等々)の影響にうまく環境適応して, より良く構造変動を遂げて行くのが望ましいと思われる。(注6)

より具体的な方策の一例として, 地域自律性再生の為には, 例えば, 当シンポジウムのメイン・テーマでもある「水と緑を守り育む」ことを共通課題とした山村と都市との相互交流事業が, 公私を問わずに活性化すること, 「なくして⁷⁾始めて知る親の恩(あるいは物の有難さ)」と言う様な言葉があったが, そんなことにならない為にも, 常日頃から「水と緑と太陽の恵み」を知り, それらを共に享受出来る山村社会と都市社会の交流を願ってやまない。以上の提言が, ややもすれば行政側への要求が強く出過ぎた嫌いもなくはないのが, 行政側の「一般住民は, もっと積極的に行政を利用, 活用してもらいたい。」と言う言葉にもあるように, 今後一層地域生活者としての山村住民のやる気も喚起したいと思う。

6. おわりに

前述の一仮説の提示も, 単にそのまま終わるのではなく, 尚一層検証を積み重ねて行く必要から, 山村社会の問題は, 私にとって今まさに緒についたばかりである。現場の林業家が言われるように, 現場の地域住民の生活に根ざした新たな「山村学」の構築が望まれるところである。今後共皆様方の御協力と御支援を賜り, 問題意識のより一層の深化を企図している。又, 当発表では個々の問題—個別的な問題—には特に触れなかったが, 8月の現地行⁸⁾に際して, 公私にわたってお世話, 御協力戴いた方々に対してはこの場を借りて深くお礼申し上げたい。

注釈, 並びに参考文献, 資料

- 1) 山村とは, 文字通り山(森林原野)に囲まれた, あるいは山の中にある村(村落)のことである。村とは, 「自然村」か「行政村」かと言った論議もあるが, ここでは深く立ち入らない。それ相応に歴史を担った人間の集合体, 小社会, 小宇宙—人間とそれを取り巻く, 森林・河川を含むところの自然環境を一つの生態系(ecosystem)ととらえる視点(生態学的見地)も重要—である。

- 2) 岐阜県林政部編『昭和61年度岐阜県林業統計書』昭和62年12月刊, 参照。
- 3) 地域診断(例. 家族診断, 時代診断)の為の処方せん
1. 実態, 問題点
 2. その原因
 3. 解決策, 対処の仕方—行政レベル(政治・経済レベル), 地域住民レベル(生活・文化レベル)
 4. 地域社会理論のあるべき姿—林進「山村のあるべき姿—ひとつの思考実験」『岐阜大学農学部研究報告』第49号, 昭和59年12月, 参照。
- 4) 「地域自律性」を本稿の文脈では, そのキーワードとして使用したい。詳しくは, 6)を参照。
- 5) リーダーシップ構造と機能—リーダーシップの問題…グループの指導者・リーダー・先覚者, 世代の問題…世代間断絶(旧世代と新世代のギャップ)をうめる役割を担う者としてのリーダー(古老・高齢者—経験豊かな群像VS.新進気鋭の若者)
- 6) Warren, R.L. (1963) The Community in America.では, 村落社会がどの程度, 外部社会の影響を受けているか, あるいは, どの程度, 「地域自律性」を有しているかによって, 村落社会の類型化を試みている。満田久義『村落社会体系論』ミネルヴァ書房, 1987, pp.56-58参照。
- 7) 次の様な相互交流事業が散見された。
1. 第7回郡上郡林材業振興大会(分収造林「たずさえの森」造成記念行事)昭和63年5月23日, 和良村
 2. 「山村と都会ちびっ子交流—愛知の小学生大桑へ」同年8月2日付信濃毎日新聞中信地区生活圏版
 3. 「山の子供か海の子と交流—高鷲・大日小生, 尾鷲の九鬼小を訪問」同年同月9日付朝日新聞岐阜版
- 8) 敢えて, 一例を挙げれば, 入手した資料によると昭和63年度岐阜県林業技術交換研修会(昭和63年7月27日)での話題提供として,
1. 高鷲村林業グループ—観光林業による地域活性化と林業グループ活動
 2. 谷汲村林業グループ—しいたけ生産と林業グループ活動
- 等の若手林業家による活発な活動が見られるし, 行政側の未来構想としては, 次のものがある。
- ・高鷲村の二十一世紀構想……1. 住居地域モデル 2. 森林活用型総合リゾートモデル 3. 21世紀当りまでに整備する幹線道路網 4. 2050年の基幹交通体系図, 高鷲村制施行90周年記念誌『人間ルポ コブシの村の九十年』高鷲村, 昭和63年3月, pp.312-319参照。